山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第62集

KANNONKOU SITE

観音溝遺跡

県道石橋・石和線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991.3

山梨県教育委員会

観　音　溝　遺　跡

1991. 3

序

本報告書は、1990年度に県道石橋・石和線の建設に先立ち実施された観音溝遺跡の発掘調査報告書であります。

本遺跡は、山梨県東八代郡石和町小石和字観音溝に所在し、付近には一昨年度発掘調査が行われ、弥生時代の水田址や木製品・土器などが数多く発見されて話題を集めた身洗沢遺跡や、今年度に発掘され、斎串・馬の骨など雨乞いの遺物が多数検出されて注目された平安時代の地耕免遺跡などが存在しております。この付近は、かつて古代甲斐国の中心として栄えた地域で、平安時代の国府跡といわれる国衙の地が存在し、条里制遺構が顕著に認められるほか、馬見塚・姥塚などの古墳が点在し、二之宮・姥塚遺跡のような大集落遺跡も発見されております。また中世では、室町中期の甲斐守護武田信重館跡と伝えられる成就院や、その対抗勢力穴山伊豆守の拠点とされる小山城址なども所在しており、古代～中世の広い時代にわたる遺跡が濃厚に存在し、甲斐国の歴史を知る上に極めて重要な地域であります。

今回調査が行われた地は、笛吹川左岸の向田集落の微高地上に位置し、すぐ南に天川が流れて、向田遺跡・塚之越遺跡・上堀遺跡など弥生時代の遺跡が集中して存在する場所に隣接しており、弥生の遺跡の発見の可能性が指摘されていたところでありますが、試掘調査の結果、予測どおり遺跡が確認されて今回の発掘となったものであります。

調査は、幅６ｍ、長さ26ｍに亙って行われ、その結果弥生時代の住居址が２軒、用水路址と思われる溝状遺構が４本検出されました。限られた範囲の発掘でありましたが、溝状遺構の検出により、本遺跡は周辺に水田をもつ遺跡ではないかと考えられます。また、高坏・壺・砥石などの遺物が出土し、特に砥石の出土は、本遺跡で金属器が使用されていたことを示す貴重な成果でありまして、当時の人々の生活を知るうえで大きな手掛かりになるものと思います。このように本遺跡は、山梨県ではまだ発掘の事例が少ない弥生時代の貴重な資料として、今後この遺跡に隣接する身洗沢遺跡や、来年度以降調査が行われる向田遺跡とあわせて調査研究が進められることが期待されるところであります。

本報告書が、弥生時代研究の一資料として多くの方々にご利用いただければ幸甚です。末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、地元の方々並びに直接調査、整理に従事していただいた方々に厚くお礼申し上げます。

1991年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　**磯　貝　正　義**

例　言

1．本書は、山梨県東八代郡石和町小石和字観音溝に所在する観音溝遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、県道石橋・石和線建設事業に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が山梨県土木部の依頼を受けて実施した。

3．発掘調査、整理作業および報告書の執筆、作成は山梨県埋蔵文化財センターが行い、同機関の小野正文、平山　優が担当した。

4．写真撮影は小野正文、平山　優が担当した。

5．本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

6．発掘調査から報告書作成に至るまでの間、下記の機関、方々からご協力、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

石和町教育委員会、向田地区自治会

目　次

例　言

第１章　調査の概要……1

第２章　遺跡の概要……2

第３章　遺構と遺物……5

第４章　成果と課題……14

挿図目次

第１図　周辺遺跡の分布図……3
第２図　遺構配置図……6
第３図　１号住居址……7
第４図　１号溝・４号溝……8
第５図　２号溝……9
第６図　２号住居址ほか……10
第７図　出土遺物……11
第８図　出土土器拓影……12
第９図　砥石……12

図版目次

図版１　試掘状況、１号住居址遺構・遺物出土状況、１号住居址遺物出土状況、
遺構全景、１号溝遺構・遺物出土状況……17
図版２　１号住居址貯蔵穴遺物出土状況、１号住居址全景、２号溝遺構・遺物出土状況
２号溝遺物出土状況、２号溝全景……18
図版３　２号溝壺出土状況、２号住居址遺構・遺物出土状況、２号住居址および周辺遺構
……19
図版４　１号住居址出土土器、１号溝出土土器・砥石、２号溝出土土器……20

第１章　調査の概要

１．調査に至る経緯

平成２年度の事業として着手されている、県道石橋・石和線の建設に伴い、山梨県教育委員会では山梨県土木課との協議にもとづき、石和町小石和観音溝の試掘調査を実施することとした。この周辺には、上越遺跡や向田遺跡などの弥生時代の遺跡が集中している地域にあたり、土器片の分布も幾つか見られたからである。その結果、天川と上手川に挟まれた向田集落の南側に位置する微高地に、弥生土器とともに、溝状落ち込みと住居址が発見され、遺跡の所在が明確となり、本調査に入ることに決定した。

以下、調査の経過を記す。

１．調査日程

平成２年10月４日　試掘調査実施、石和土木事務所と協議、溝状落ち込みを確認。

10月11日　発掘の通知を県教育長に提出する。

10月15日　調査開始

11月15日　調査終了　なお、調査終了後に石和警察署に発見届けを提出する。

２．調査及び整理組織

調査主体　　山梨県教育委員会

調査担当者　山梨県埋蔵文化財センター

副主査・文化財主事　小野正文

文化財主事　平山　優

作業員・整理員

小越早苗、斎藤ひとみ、丸山百合子、山下和子、石川仲子、中村文枝、中込よしえ、宇野和子、出月多津子、出月満寿江、梅林はなの、長田可祝、出月遊亀子、長田和子、長田明美、宇野文子、矢崎ます子

２．調査方法

観音溝遺跡の今回の調査区域は全長26m、幅12m、面積約300m²であるが、遺跡の西側半分は試掘調査により、攪乱や土質の変化が認められたので、実際の調査面積は約200m²となる。遺跡調査はまず、農道の部分のアルファルトの撤去から始まり、旧農道の下に遺構が残っているかどうかの確認から始めた。この結果、農道建設の際に、地面をやや掘り込んで基礎が建設され、その上に道路が敷設されているため、遺構は住居址と溝状落ち込み（即ち掘り込みより深い部分の遺構）のみしか残存していないことが判明した。

このように遺跡の全体の調査区域から、道路方向にそって、４ｍメッシュのグリットを設定した。これを北側からそれぞれ１－ａ，２－ａとして、以下遺跡の南端に向かって、それぞれ１－ｇ、２－ｇまで計14本の杭打を行った。

調査はまず、試掘調査段階で発掘された溝状落ち込みと住居址（１－ａ～ｃ，２－ａ～ｃグリット）の発掘から始めた。その結果、それぞれから弥生後期の土器が出土し、遺跡の時代がほぼ確定され、それぞれを１号溝・１号住居址とした。次いで、１－ｃ～ｄ，２－ｃ～ｄ地区で検出された溝状落ち込みの発掘を実施、そこからも弥生後期の土器を多数検出し、これを２号溝とした。次に、遺跡南側（１－ｃ、２－ｃグリット）の土の変色した部分の確認作業に入り、その結果、住居址の３分の１を検出し、これを２号住居址とした。また２号住居址の確認と併せて、その周りにめぐらされた周溝も確認し、さらに周辺からは幾つかの土坑も発見された。そして遺跡の南端からは、非常に浅くて細い溝状落ち込みが確認され、これを３号溝とした。そして１号溝に隣接して溝状の落ち込みが、１号溝と途中で切り合う形をとりつつ、１号住居址を巻くように入り込んでおり、これは２号住居址の周りをめぐる周溝と同じような性格のものと考えられる。これを４号溝とし、遺跡の調査を終了した。

第２章　遺跡の概要

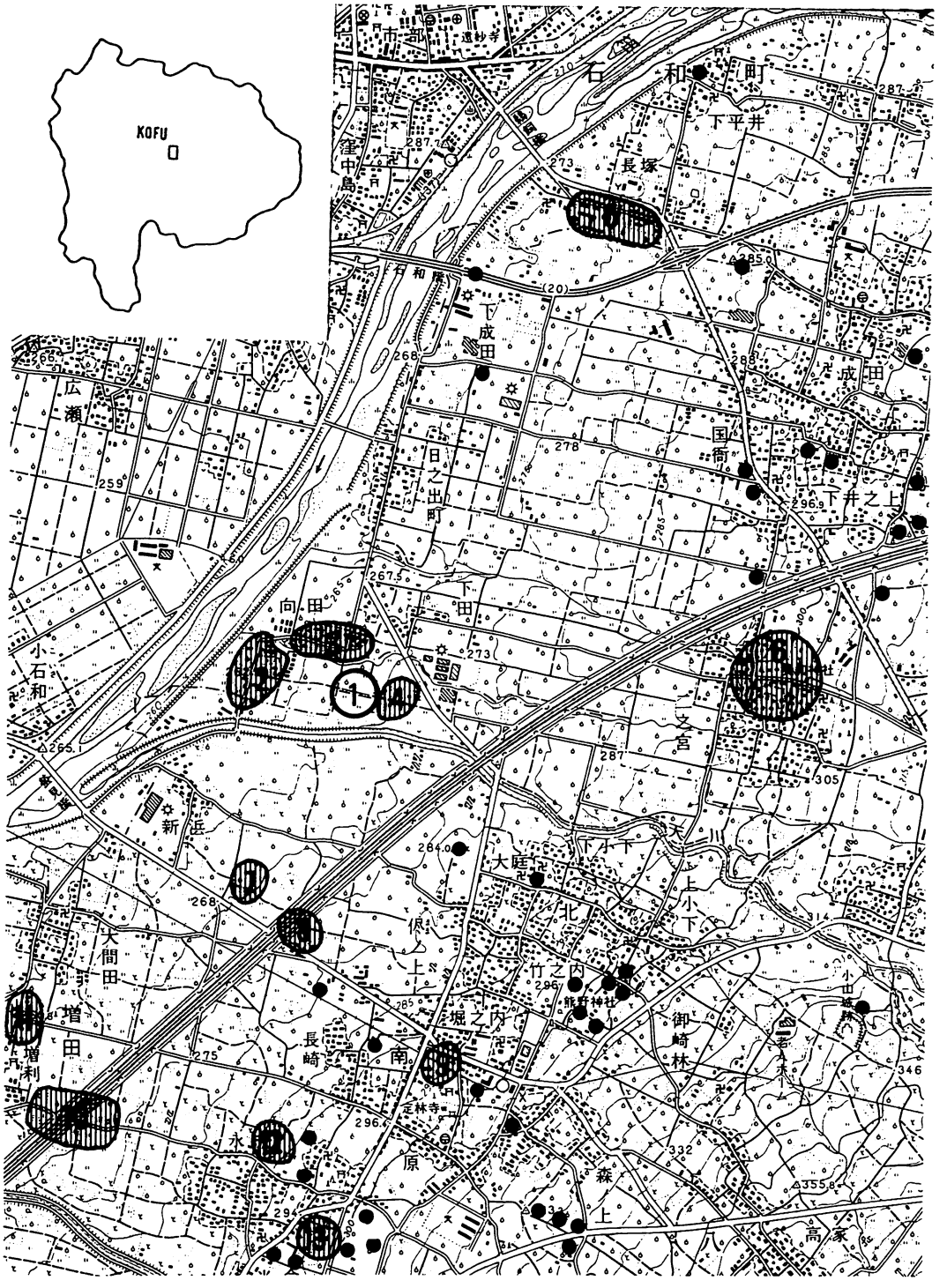
１．遺跡の立地

観音溝遺跡は、山梨県東八代郡石和町小石和字観音溝に所在する。この遺跡は、南に天川を控え、北にも上手川があり、河川に挟まれた微高地に位置している。そのような地理的条件から、この周辺は天川の度々の氾濫に見舞われていたらしく、発掘に伴う試掘調査のおりには、遺跡から天川に向かって、かなりの厚さの砂礫層が確認された。詳細を述べると、調査に先立つ試掘調査では、天川から向田の集落に向かって、５ｍの間隔で３m^2のトレンチ７ケ所を設定し、地層の確認を行った。その結果、まず天川から約40m北に設定した1号試掘坑では、表土が厚さ0.4～0.5mほど堆積した下に、１ｍにわたって砂礫が堆積しており、さらにその下には1.5mほど砂層が続き、粘土層に到達する。

次の２号試掘坑では、表土下0.7mほど黄色粘質土が堆積したあと、その下に1.1mにわたって砂層と粘土層の混合堆積層が続き、その下の地表から２ｍの位置に、泥炭層が存在した。

３号試掘坑は、表土下0.78mほど黄色粘質土が堆積したあと、0.16mにわたって黄白色粘土層があり、その下に0.90mほど砂礫層が堆積している。泥炭層はその下、地表から1.90mの地点に存在していたが、その堆積層は0.1mと非常に希薄で、その下からは更に砂層が続いている。

４号試掘坑では、地表土が0.9mに亙って堆積した後、1.1mほど黄褐色土と黄色粘土層が存在し、その下には１ｍほど砂層と粘土層の堆積が見られた。黒色土層は、さらにその下、地表から２ｍのところに所在している。



第１図　周辺遺跡の分布図（弥生）

１観音溝遺跡　２塚之越遺跡　３上堀遺跡　４向田遺跡　５石和高校周辺遺跡　６扇田・中通・後畑遺跡　７身洗沢遺跡　８扇田遺跡　９原遺跡　10沢木遺跡　11神の木遺跡　12長崎遺跡　13御所遺跡
●印は古墳

次の５号試掘坑では、地表から0.7m下から、0.9mに亙る黄色粘土層が堆積し、その下に砂層・礫層が交互に堆積していた。

その後の６号試掘坑と５号試掘坑との間隔は、用地買収の問題などもあって、約60mほど間く結果となり、その間の地層の特徴を把握することが出来なかった。

次の６号試掘坑から、観音溝遺跡の１号溝が確認されたのであるが、その層序は地表土が0.6mほど堆積した後、0.4mほど黄褐色土が存在した下に、黄色粘質土が堆積していたが、その中に黒色土が溝状に落ち込んでおり、それが溝状遺構であることが確認された。

最後の７号試掘坑は、地表土が0.4mほど堆積した後、その下から黄色粘土層が1.2mに亙って堆積していた。その後、地形は急に遺跡北側の上手川に向かって落ち込んでおり、試掘坑の設定ができなかった。

以上を総合すると、この遺跡の周辺は、かつて天川から遺跡に向かって、徐々に高くなり、遺跡から上手川に向かって低く落ち込むという状況であったことが推測され、遺跡確認地は微高地であったことが判断できるのである。遺跡周辺部の砂礫層の夥しい堆積は、それが天川の度々の氾濫によって次第に埋没したことを示しており、それがまた遺跡確認地が周辺部とは異なって、高い位置に所在していたことを明らかにするものである。そして上手川を挟んで地形は再び高くなり、その微高地上に向田の集落が展開している。

２．周辺の遺跡

観音溝遺跡周辺は、縄文から平安時代にかけての遺跡が数多く点在しているが、弥生時代の遺跡に限ってみると、それはいずれも山間部から笛吹川へ向かって流れる河川の周辺部に位置している。それは、山間部から笛吹川へ向かって開けた扇状地の、土壌と水利に恵まれた地理的条件を巧みに利用したものと見られ、特に観音溝遺跡は同じ微高地上に塚之越遺跡・向田遺跡が、また隣接する微高地（現在の向田集落の所在地）には上堀遺跡が存在していた。このように観音溝遺跡周辺に、特に弥生時代の遺跡が集中して存在することは、先にも見たように、天川や上手川に挟まれた水の便のよいことや、同時に微高地が所在することなど、水利に恵まれた地域に付随する水害などのマイナス面を回避することが、可能であった非常に良い条件にあったことがその背景にあるものと推察される。

本遺跡では、弥生時代の水田址などは確認できなかったが、天川を挟んだ向かいには、畦畔に区画された水田６枚のほか、弥生後期の土器や木製農耕具を検出した八代町の身洗沢遺跡が存在しており、その水田址は微高地と微高地に挟まれた低い小谷に認められているので、天川沿いや観音溝遺跡と上越遺跡の位置する両微高地に挟まれた上手川沿いなどの地域に水田が存在した可能性もあり、周辺の弥生時代遺跡の立地と共通する点も認められる。このような点は、今後慎重に検討さるべきであるが、弥生集落と生産地域である水田との立地の特徴や関係などを追及する際の貴重な手掛かりになるに違いない。

第３章　遺構と遺物

１．基本層序

観音溝遺跡では、周辺部において深掘りを実施し、基本層序の確認を行った。この遺跡の周辺は、先にも述べたように、天川へ向かって深く落ち込んでおり、砂礫や砂層が厚く堆積する地域であるが、この遺跡の立地する微高地上付近は、一変して砂礫や砂層の厚い堆積は見られず、表土のすぐ下は粘性の強い土壌が存在していた。

試掘坑の地層のⅠ層は旧水田床土で近年では果樹園として利用されていたため、耕作土として天地返しが顕著に見られ、これが約70cmにわたって堆積していた。次のⅡ層は、約25cmにわたって堆積する赤褐色土層（鉄分付着土層）であり、遺物・遺構の検出は見られない。そしてⅢ層が黄色粘質土層で、遺跡はこの層を掘り込んで形成されており、遺物も同様である。

２．住居址

ここでは、本遺跡における住居址と出土遺物の概略について記述していくが、その際に、住居址および出土遺物の帰属時期については、県内各所の弥生時代の土器編年をもとにした。

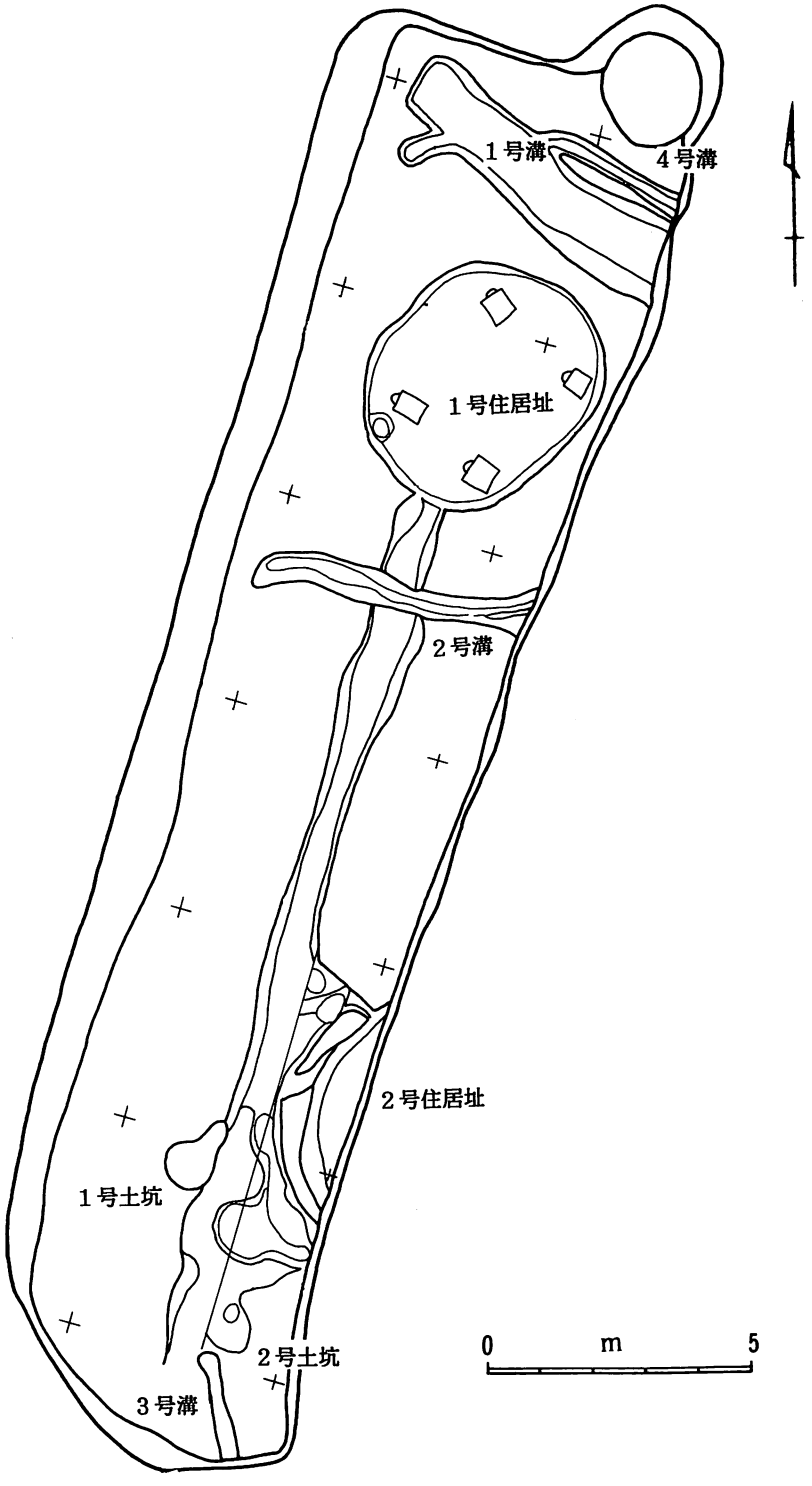
１号住居址（第３図）

１－ａ、１－ｂ、２－ａ、２－ｂグリットに位置する。形態は楕円形を呈する。規模は南北475cm、東西380cmを測る。２－ｂ杭周辺に炉の跡と見られる焼土を確認した。また住居址の南西コナーからは、弥生土器片を伴う土坑を検出した。その規模は、南北67cm、東西56cmで貯蔵穴であると推定される。住居址は、農道建設に伴う掘り込みと、コンクリート製の側壁のために中央から西側にかけて削られており、この部分の厳密な住居壁面の確認はできなかった。遺物は、住居址の南側と西側の貯蔵穴周辺に集中して認められ、北東の土器集中区と東側には炭化物が多く検出された。

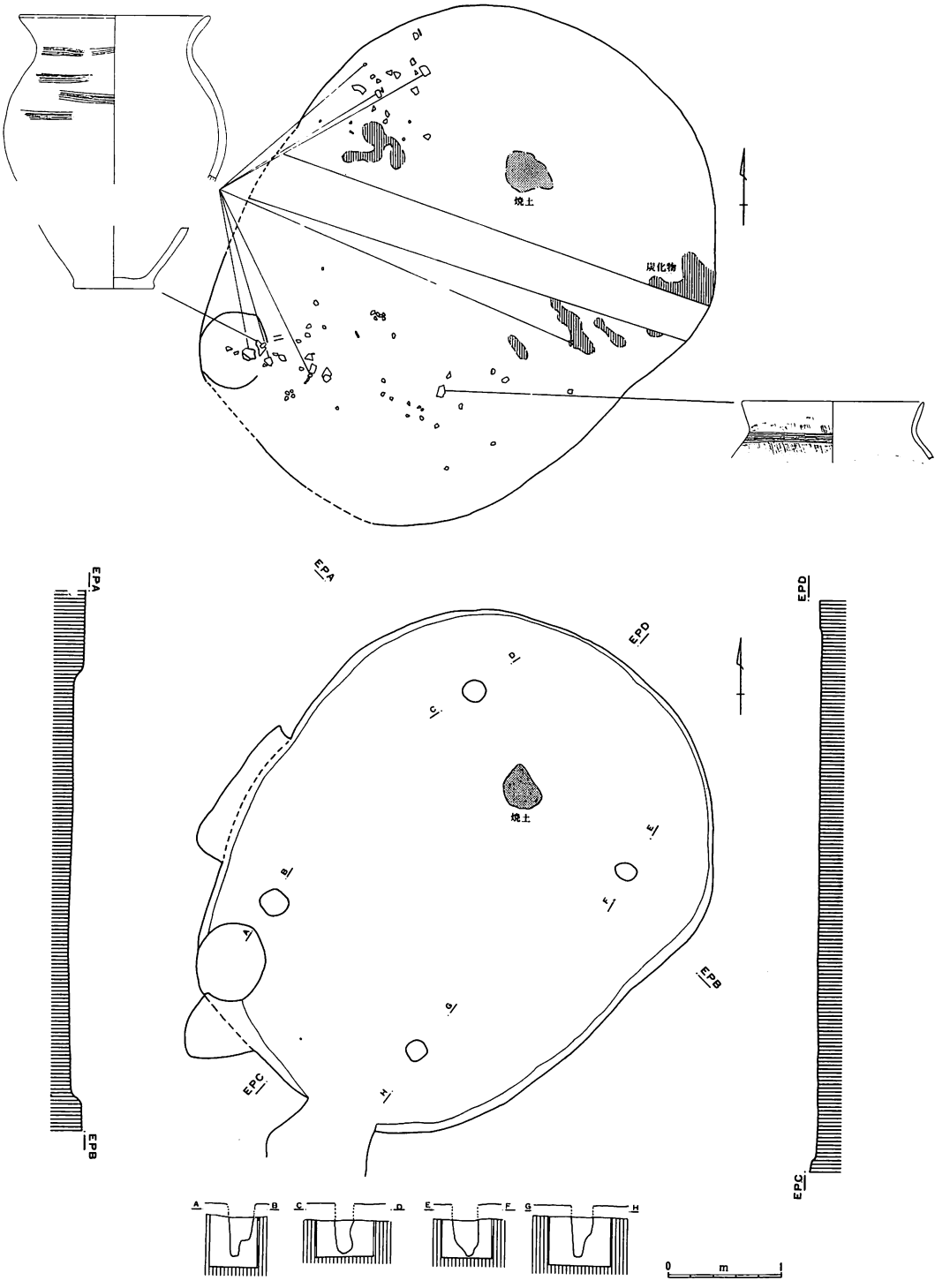
２号住居址（第６図）

５－ａ、５－ｂグリットに位置する。主要部分が調査区域外に位置するため、全体の規模は不明であるが、形態はこれも楕円形を呈するものと思われる。調査で確認された部分のみのデータを記すと、全長427cm、最大幅91cmである。この住居址は、幅約50cmの堤部を持ち、その外に周溝と考えられる溝状遺構をめぐらせている。

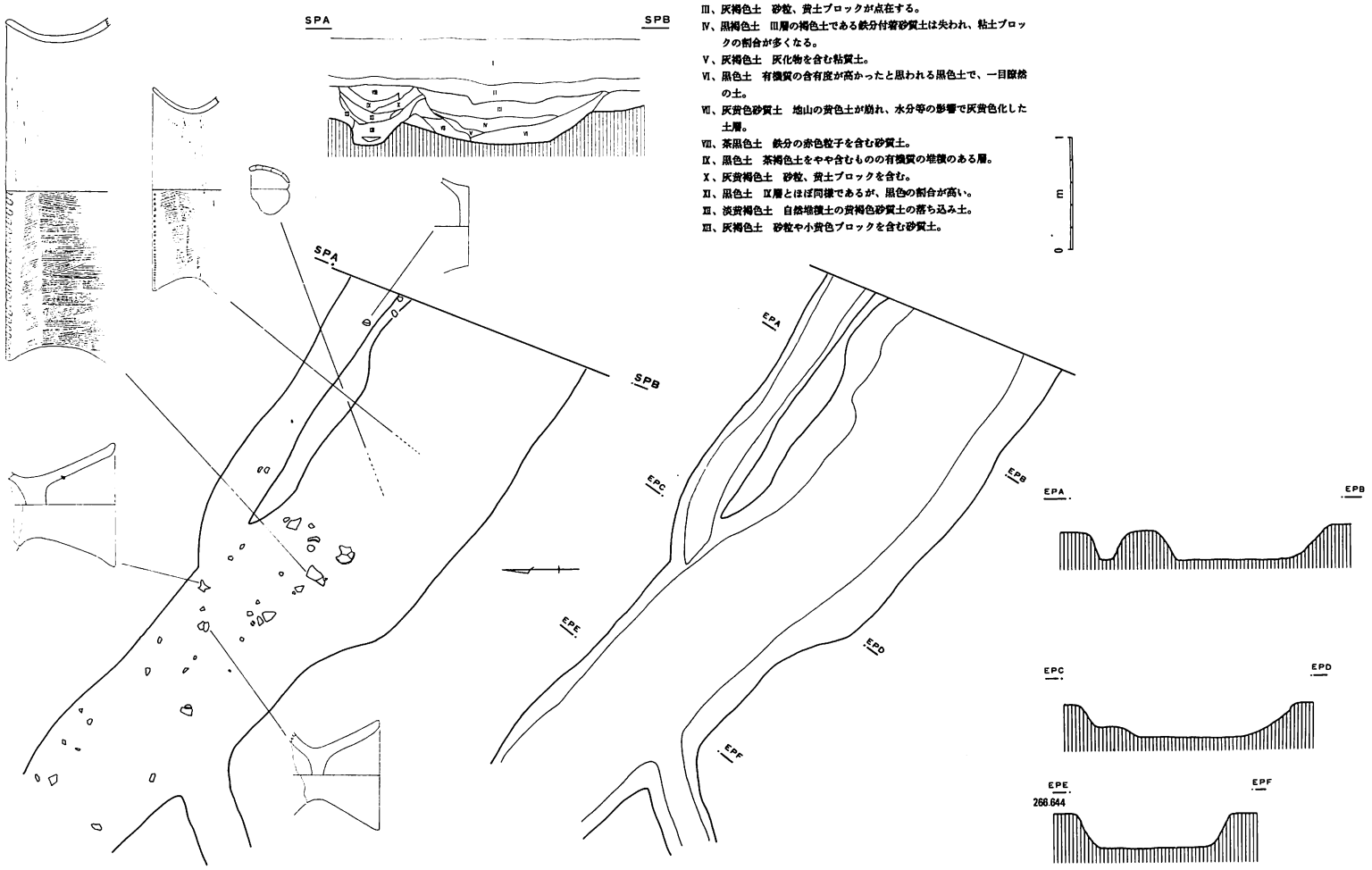
内部からは、高坏をはじめとする弥生後期のものと見られる土器が幾つか確認され、１号住居址とほぼ同期のものと考えられる。また、２号住居址の周辺をめぐっている溝状遺構からも、土器が多く検出され、時期も住居址と一致する。このような周りに溝を持つ弥生後期の住居址は、本県では管見の限りでは類例がなく、この遺跡を考えるうえで重要である。しかし、この溝は２号住居址全体にまわっているかどうかは未確認で、調査区域でも途中の６－ｂ杭の辺りでとまってしまい、かわりに土坑が掘り込まれていることなど、不明確な部分も多く残されて



第2図　遺構配置図

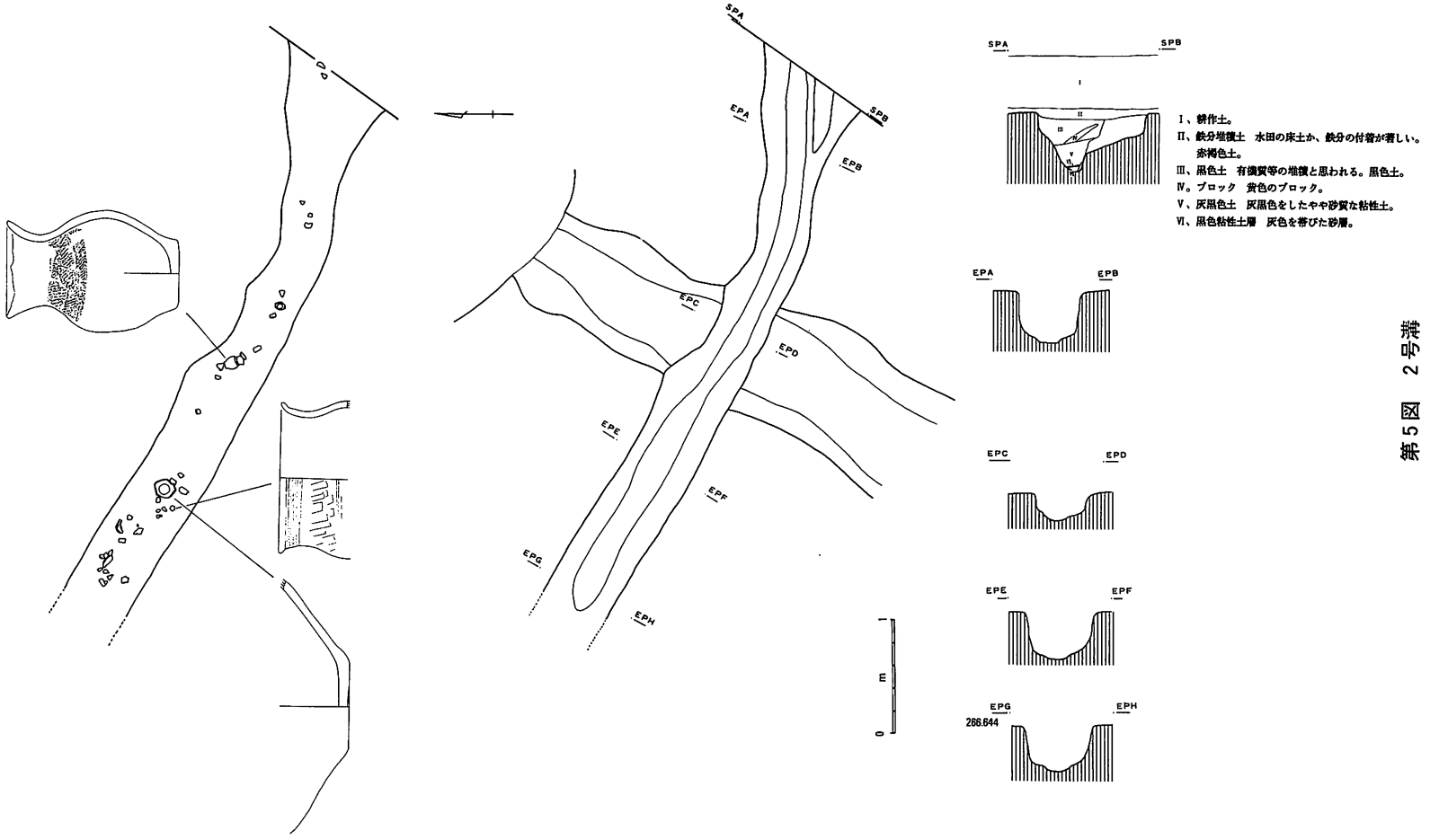


第3図　1号住居址

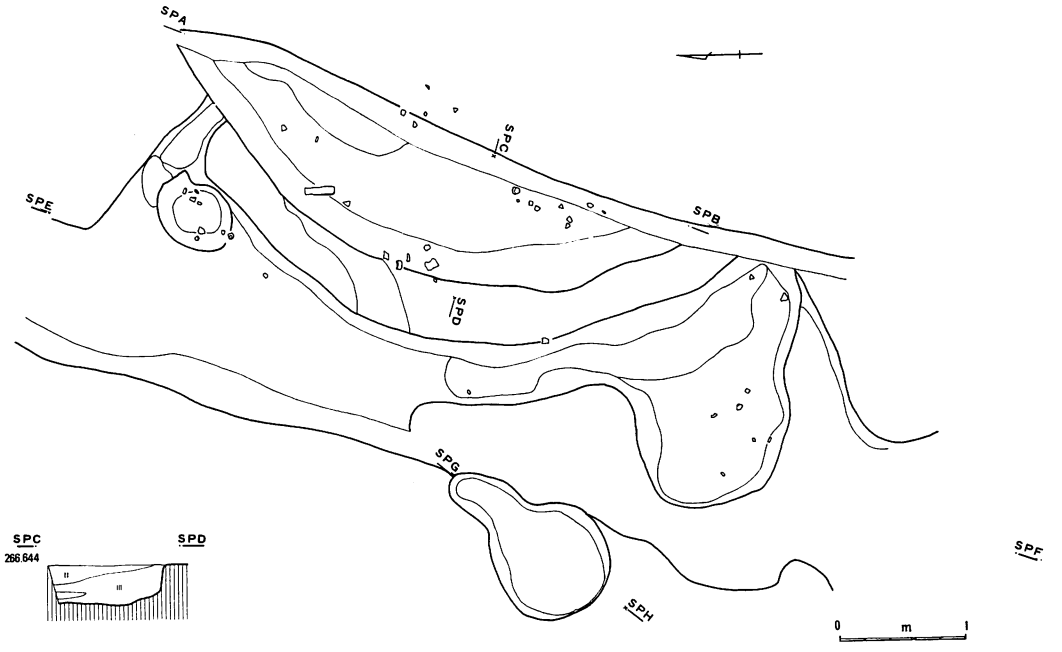


Ⅰ、耕作土。
Ⅱ、赤褐色土　耕作土下の鉄分付着土層。
Ⅲ、灰褐色土　砂粒、黄土ブロックが点在する。
Ⅳ、黒褐色土　Ⅲ層の褐色土である鉄分付着砂質土は失われ、粘土ブロックの割合が多くなる。
Ⅴ、灰褐色土　灰化物を含む粘質土。
Ⅵ、黒色土　有機質の含有度が高かったと思われる黒色土で、一目瞭然の土。
Ⅶ、灰黄色砂質土　地山の黄色土が崩れ、水分等の影響で灰黄色化した土層。
Ⅷ、茶黒色土　鉄分の赤色粒子を含む砂質土。
Ⅸ、黒色土　茶褐色土をやや含むものの有機質の堆積のある層。
Ⅹ、灰黄褐色土　砂粒、黄土ブロックを含む。
Ⅺ、黒色土　Ⅸ層とほぼ同様であるが、黒色の割合が高い。
Ⅻ、淡黄褐色土　自然堆積土の黄褐色砂質土の落ち込み土。
XIII、灰褐色土　砂粒や小黄色ブロックを含む砂質土。

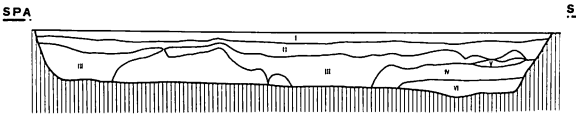
第4図　1号溝・4号溝


SPA
SPB
EPA
EPB
EPC
EPD
EPE
EPF
EPG
EPH
0
1
m
266.644
Ⅰ、耕作土。
Ⅱ、鉄分堆積土　水田の床土か、鉄分の付着が著しい。赤褐色土。
Ⅲ、黒色土　有機質等の堆積と思われる。黒色土。
Ⅳ。ブロック　黄色のブロック。
Ⅴ、灰黒色土　灰黒色をしたやや砂質な粘性土。
Ⅵ、黒色粘性土層　灰色を帯びた砂層。

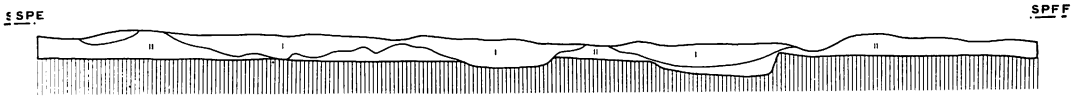
第5図　2号溝



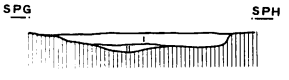
Ⅲ、灰黒色土　灰黒色粘質土で鉄分の付着粒が混在。
Ⅳ、灰黒色粘質土で有機質を多く含んだもの。



Ⅰ、耕作土。
Ⅱ、黄灰色土　水田耕作による鉄分が多く見られる土層。
Ⅲ、灰黒色土地　灰黒色粘質土で鉄分の付着粒が混在。
Ⅳ、灰黒色粘質土で有機質を多く含んだもの。
Ⅴ、埴土
Ⅵ黄褐色土で小礫を含んだ砂質土。

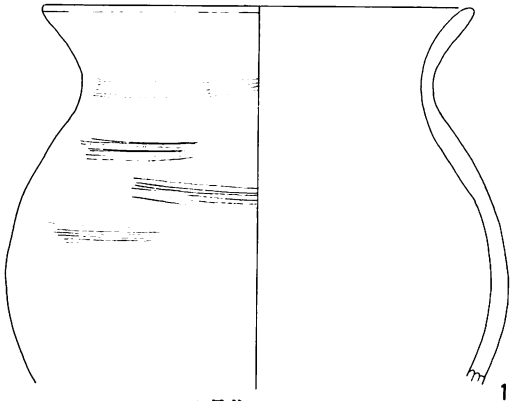


Ⅰ、灰黒色土　２号住居址の周溝内の土で灰黒色の粘質土。
Ⅱ、黄色土　黄色砂質土で小礫を多く含む。



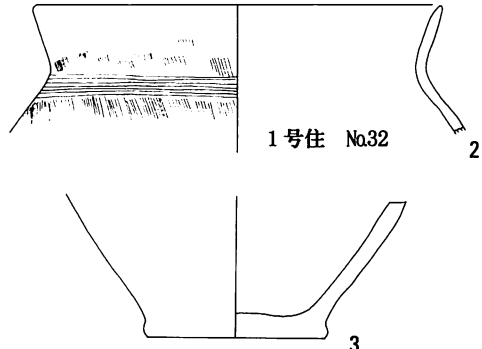
Ⅰ、砂質灰黒色土　道路下のため硬くしまっている。
Ⅱ、黄灰色土　黄灰色土で粘質を帯びている。

第６図　２号住居址ほか



1号住　No.20　48　49　5　8
62　64　61　24

1

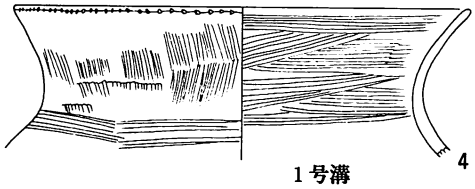


1号住　No.32

2

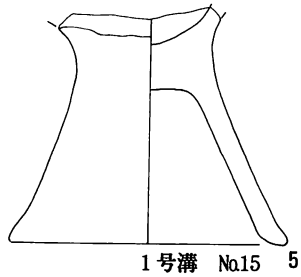
1号住　No.66

3



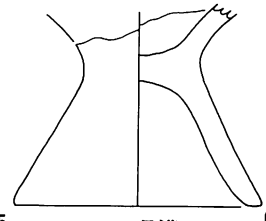
1号溝

4



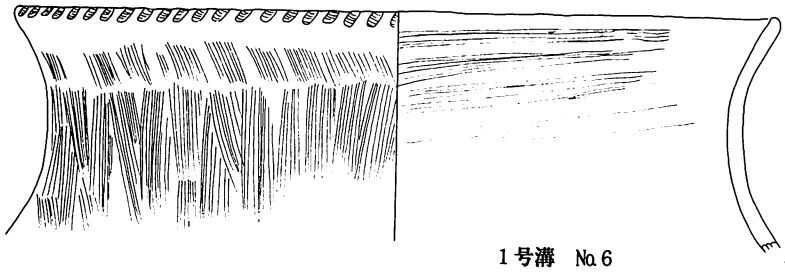
1号溝　No.15

5



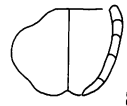
1号溝　No.17

6



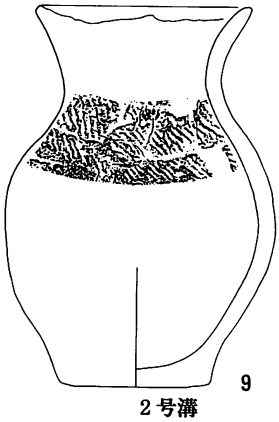
1号溝　No.6

7



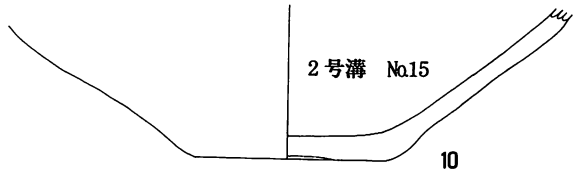
8

1号溝方式



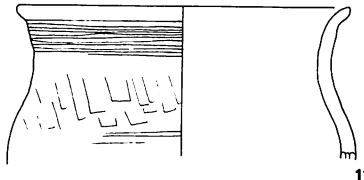
2号溝

9

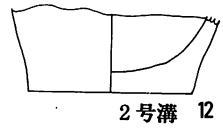


2号溝　No.15

10

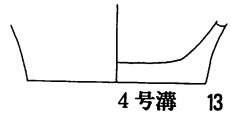


11



2号溝

12



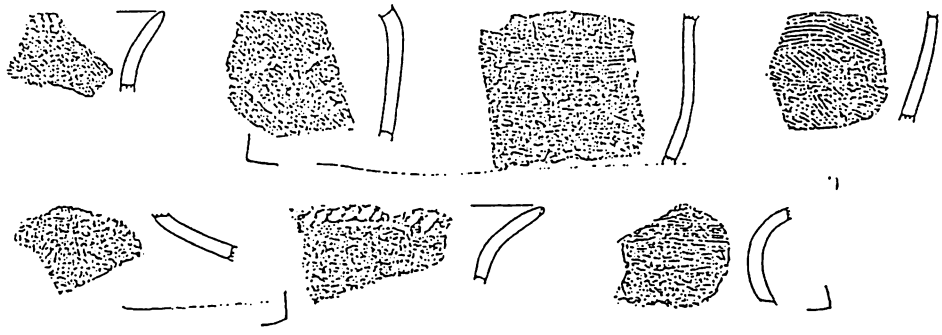
4号溝

13

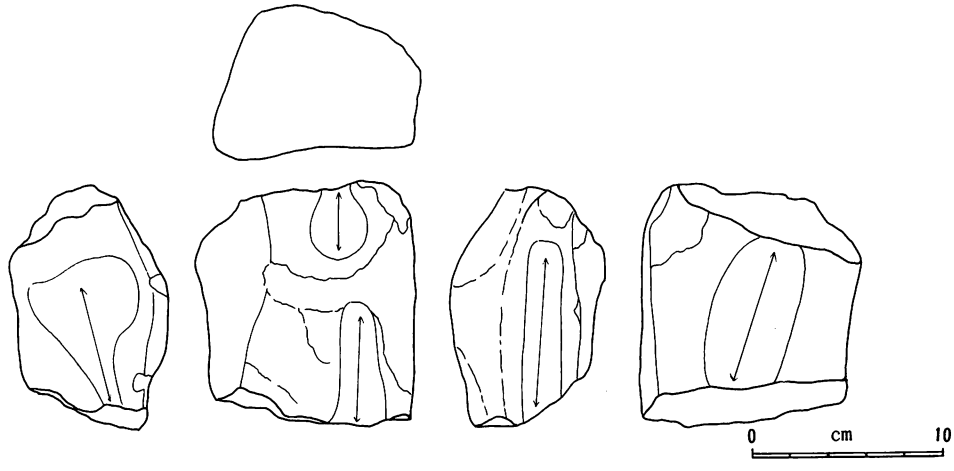
0　cm　5

1～3　1号住居址　4～8　1号溝　4～12　2号溝

第7図　出土遺物



第８図　出土土器拓影



第９図　砥石

いる。

３．溝状遺構と遺物

本遺跡では、４本の溝状遺構が確認されている。その時期区分については、住居址の場合と同様、出土した土器の編年によって確定した。

１号溝・４号溝（第４図）

１－ａ、１－ｂグリットに位置する。全長581cm・幅153cmを測る。内部からは高坏をはじめ、甕・壺など多数の弥生土器を検出した。その土器の編年区分からみて、溝の時期は弥生後期であることがはっきりしており、１・２号住居址と一致する。

次の４号溝は、２－ｂグリット内を一号溝とほぼ平行に走った後、１－ｂグリット内で１号溝と交差して１号住居址を巻くように掘られていた。内部からはやはり弥生後期の土器片が多く発掘され、時期が１号溝や両住居と一致することが判明したが、１号溝よりも若干古い溝で

あることが推察され、１号住居址を巻くように掘られていることから、これとの関連も検討される必要がある。

２号溝（第５図）

１号住居址の南側、３－ａ、ｂグリットに位置する。全長522cm、幅61cmを測る。深さは、西から東へ向かって深くなる傾向にある。内部からは、壺や甕をはじめとする、弥生後期の土器が数多く検出され、やはり他の溝や住居址と同時期の遺構であることが判明する。

なおこの溝の特徴は、東に向かってやや左に方向を変えていることであり、１号溝と交差し、４号溝と上流で接合している可能性も考えられ、また１号住居址との関連も考えなければならない。

３号溝（第２図）

６－ａ、ｂグリットに位置する。全長192cm、幅30cmを測る。内部からはごく少数ながら、弥生後期の土器片が検出されており、これも時期が他の遺構と同時期であると考えられる。なおこの溝がどのように２号住居址と関係するのか、特に住居址を囲じょうする周溝と同様な役割を持つのか、或は持たないのか今後の課題とするところである。

４．出土遺物（第７図）

１．甕、１号住居址出土。口径17cm、胎土は細かな砂粒が顕著である。焼成良好な暗褐色の土器である。頸部から肩部にかけて調整痕が見られる。

２．甕、１号住居址出土。口径16cm、胎土は赤色粒子と砂粒を多く含む、赤色の土器である。頸部に縦位にハケ調整があり、その上に横位にハケ調整が一周する。

３．甕、底部。１号住居址出土。底径７cm、胎土は砂粒を含み、やや粗い。

４．甕、１号溝出土。口径18cm。口唇部に刻目を有する。頸部に縦位の調整痕を施し、肩部との境には横位の調整痕がある。内面にも調整痕が顕著である。

５．高杯脚部、１号溝出土。脚部の底径11cm。やや砂粒の目立つ胎土である。器壁に赤彩された痕跡がある。

６．高杯脚部、１号溝出土。底径10.8cm。やや砂粒の目立つ胎土である。やはり器壁に赤彩された痕跡を有する。

７．甕、口径30.2cmを測る大形の土器である。口唇部に調整痕と同じ工具による刻目を有する。頸部に縦位にハケ調整痕を有する。また内面にも横位の調整痕がわずかに見られる。

８．ミニチュア土器。１号溝出土。口径４cm、高さ３cmを測る。

９．壺、２号溝出土。口径8.5cm、高さ15cm。小型の壺。であるが、焼成が悪く、破損しやすい。頸部には無節のＲを施文している。

10．壺の底部。２号溝出土。底径7.5cm。底面は摩耗が著しい。赤彩の痕跡が見える。

11．甕、２号溝出土。口径13.2cm、頸部にハケ調整が巡り、肩部にヘラ調整痕が顕著である。

12．底部、２号溝出土。底径6.4cm。

13. 底部、4号溝出土。底径6.9cm。

（第8図）

1．口縁部破片、1号住居址出土。口唇部に刻目を有し、それ以下はハケ調整を有する。

2．胴部破片、2号溝出土。粘土の輪積痕が明瞭に残るので、甕の胴部と思われる。

3．胴部破片、2号溝出土。上部に縦位のハケが見え、以下は横位のハケ調整であるので、甕。の頸部から肩部にかけての破片と思われる。

4．胴部破片、2号溝出土。斜めのハケの上に横位のハケ調整が見える。

第4章　成果と課題

1．遺構について

観音溝遺跡では2軒の弥生時代住居址と4本の溝を検出した。県下の弥生住居址は現在200余軒を数える。本遺跡の1号住居址も楕円形プランをなし、長軸475.0cm、短軸380.0cmを測る。この種の住居址は本件の同時代の住居と比較して、平均的というより、やや小型の部類に属するものと言えよう。金の尾遺跡で32軒で長軸の平均が559.4cm、短軸の平均が464.9cmである。六科丘遺跡33軒で長軸平均588.5cm、短軸平均468.5cm、上の平遺跡で長軸平均471.3cm、短軸平均403.8cmである。金の尾、六科丘、柳坪、向原、中田、堂の前、上の平、一城林、上野、上野東、西田、牛石の各遺跡の平均は長軸548.3cm、短軸456.2cmである。（ただし、報告書に長短軸が明記されているものは集計に入れた。）

この観音溝の1号住居址の場合は2号溝と4号溝が接合して、住居址を取り囲むのではないかと定され、今後の該期の住居調査の課題となろう。また2号住居址の場合は断面図に焼土の見られる所を床面とすれば、約30cmの周堤帯をもった住居址と見なすことが出来よう。これは著名な登呂遺跡の住居址のような様相をなすものと思われる。ただし、周堤帯の外側の溝は全周しないようである。

2．土器について

観音溝遺跡での出土遺物は極めて少ない。遺構的に4号溝と1号溝とが重複関係をもつことから、遺構の時期に時間差があることはたしかだが、極めて短期間の内に納まることは、出土土器からほぼ理解されよう。

2号溝の頸部に縄文を有する壺形土器は弥生後期にしばしばみられるもので、後期中葉に位置しよう。また1号溝出土の高杯脚部もまたこの時期に位置づけらよう。

山梨県下の弥生遺跡と同様に出土遺物が極めてすくなく、時期決定には苦慮せざるを得ない。

3．石器について（第9図）

山梨県内の弥生時代の竪穴住居の発見件数も200軒余を越える状況となり、ようやく弥生時

代の論議が高まりつつあるが、その生産用具については、発見例が極めてすくなく、殆ど言及もされていないので、ここでは特に石鍬、石庖丁、砥石について若干の概要を述べてみたい。

打製石斧

石鍬の確実な例は六科丘遺跡6号住居址と20号住居址出土の石鍬である。いずれも縄文時代のばち形の打製石斧に類似した形態であるが、刃部の湾曲が少なく、ほぼ直線に近く、石器の中央部が結縛の為かやや内湾する傾向が窺える。これと類似した形態を有する石斧は金の尾遺跡では第201図16があたるであろう。またこれは長野県伊那地方の該期の石鍬と類似した形態である。こうした特徴的な石鍬は別として、金の尾遺跡の弥生住居址に見られる打製石器は弥生時代のものと直裁的に判断するには、なお多くの研究を必要としよう。

これとは別に韮崎市堂の前遺跡19号住居址の2点の打製石斧は厚さ3cmほどの偏平な打製石器であるが、これも縄文の石器に見られるものと判別が困難である。ただし、これらの石器のなかでも金の尾遺跡21号住居址、33号住居址出土の横刃形打製石斧は長軸の両端にえぐり込み風の剝離が認められ、弥生石器と認定される。

石庖丁

打製の石庖丁とされるものは、金の尾遺跡17号住居址から2点出土している。磨製の石庖丁は韮崎市堂の前遺跡20号住居址から1点出土しており、単孔のものである。時期的にはやや下るが、古墳時代の塩山市の西田遺跡C区第3号住居址から長軸の両端に孔を持つ石庖丁が出土している。

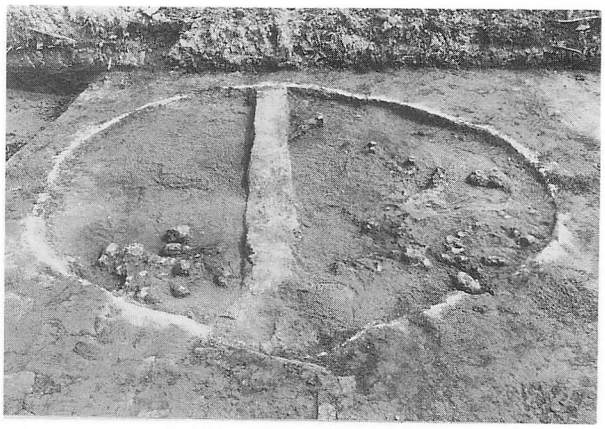
砥石

弥生時代が金属器の時代であるから、当然砥石の出土はある訳で、金の尾20号住居址で2点、18号住居址から1点の出土がある。また六科丘遺跡では24号住居址と1号溝状遺構から出土している。この六科丘遺跡の2点は後の時代の砥石に形態的に類似したものである。これに観音溝遺跡の砥石を加えることができる。他の弥生石器と同様、出土点数が極めてすくない。

図　　版

遺構全景

試掘状況

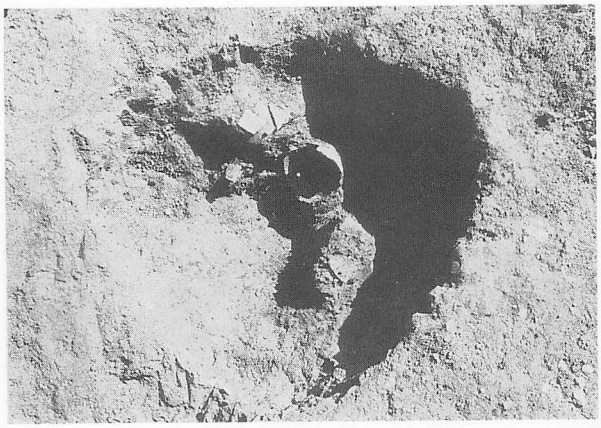


1号住居址遺構・遺物出土状況

1号溝遺構・遺物出土状況

1号住居址遺物出土状況

図版2



1号住居址貯蔵穴遺物出土状況

2号溝遺構・遺物出土状況

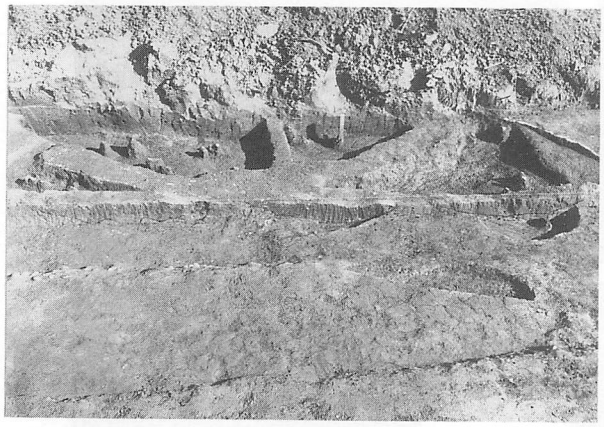
1号住居址全景

2号溝遺構全景

2号溝遺物出土状況

図版3

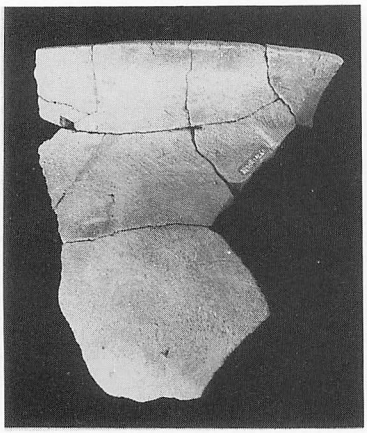
2号溝壺出土状況

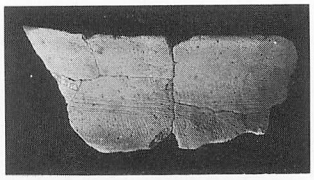


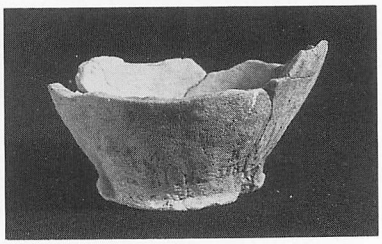
2号住居址遺構・遺物出土状況

2号住居址および周辺遺構

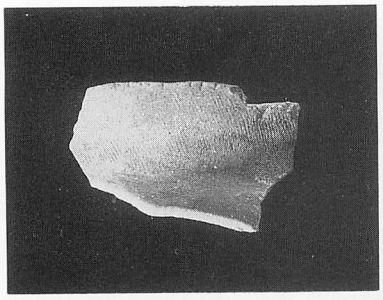
図版4

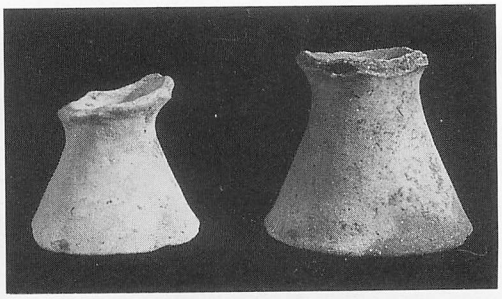


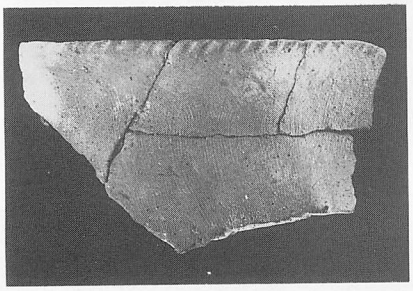


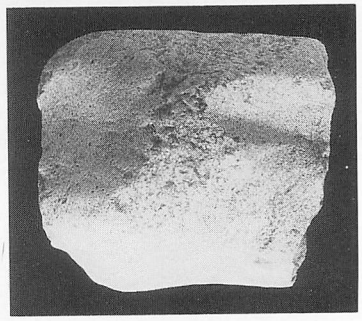


1号住居址出土土器

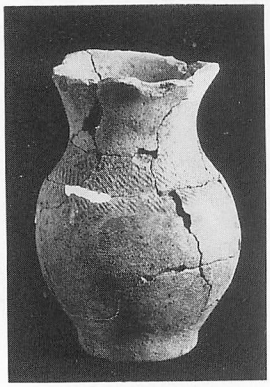


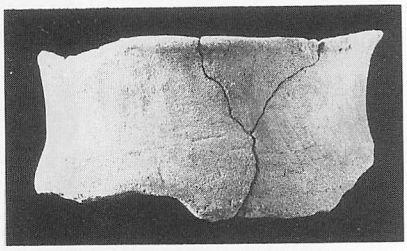


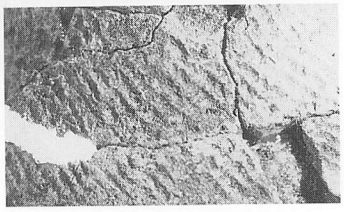




1号溝出土土器・砥石







2号溝出土土器

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第62集

印刷　1991年３月25日
　　1991年３月30日

観　音　溝　遺　跡

編集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
ＴＥＬ　0552－66－3881

発行所　山梨県教育委員会

印刷所　株式会社　少國民社